

— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

巴田朱根は、母が朱根を産んだときに亡くなり、父と二人暮らしである。いつも二時間目から登校するが、理由を聞いても要領を得ない一言しか答えない。反抗的ではないが勝手に行動することが多く、時に乱暴もはたらく。放課後はいつも一人で林の中で遊んでいる。この春赴任したばかりの明子は、担任として何とかしようと思うのだが、草花の絵がうまいことに気付いた程度で、糸口すらつかめない。

白線引き機を拝借したお礼にと言つて、七月の初め、空木がオート三輪の荷台に笹竹をいっぱい積んで分校へ持ち込んできた。七夕の飾りに使う小ぶりの笹竹だ。二十本あったので、分校の生徒十八人全員に配ることができた。

① 明子のクラスでも、(a) 図工の時間に、それぞれの笹飾りをつくらせた。折り紙でこしらえた牽牛と織姫や、星形に切った色紙、輪つなぎ、そして(b) 五色の短冊。

願いごとを短冊に書く生徒たちの手もとを明子は上から覗いて回った。

新太郎の願いごとは(ほんまもんのバットがほしい)

辻山房代は(お米がぎょうさんとれますように)

乃村雪枝は(アメリカとソ連が仲よくしますように)

小坂豊は、ひとこと(エベレスト)

エベレスト山に登りたいということか。二年前(注、一九五三年)、エドモンド・ヒラリーがエベレストの初登頂に成功したニュースが世界を沸かせたが、豊は自分も登山家をめざそうと思つてゐるのだろうか。寡黙な子なので、心の

中がよくわからない。

弟の保は、明子が覗きこもうとすると、体で隠して見せなかった。そのくせ新太郎とは見せっこをしている。

さて、巴田朱根。この子はどんな願いを書くのだろう、と(一)(二) 関心を持つて見守つたが、何も書いていない。五年生ともなるとこんなことがばかしく思えるのだろうか。雪枝にしても、教師への義理でいちおう書いておいた、という醒めた態度が仄見える。

「願いごと、書かないの？」

② そつと尋ねると、朱根は長めのおかつぱの髪に両手を突っ込んで掻き回しながら、

「何書いたらええのんか、わからへん」と小声で答えた。

「何でも思つたことを書けばいいのよ」

「それがわからへん」俯いてつぶやく。

「じゃあ、むりに書かなくてもいいわ。草花の絵でもいいわ。そしたら草花がこれからたくさん咲いてくれるかもしれないでしょう」

朱根は黙つてうなずき、何かの草の絵を描きはじめた。

「センセ」と乃村雪枝が手をあげた。

「はい、何？」

「街の子らは、この笹を川に流すと聞いたんですけど、ほんまですか？」

話す抑揚がおつとりとやわらかいのは、京都育ちという母親の影響だろうか。

雪枝に問われて、そういえばそうだった、と明子も思い出した。

「街の子、というか、海へそそぐ大きな川があるとところでは笹飾りを流すこともあるわね。先生も子供のころ橋の上から流しに行ったことがあるわ。川に流したら願いが天に届くと聞いたから」

「川に流したら、願いが届くん？」新太郎が念を押す。

「そういう言い伝えがあったのよ」

「そやけど——」と雪枝は言う。「みんながそうやって笹を流したら、川はゴミだらけになりませんか？」

「そのとおりね。まあ、笹も紙も自然のものだから害はないとは思うけれど、かといって、あんまりたくさん笹が流されたら、(へだ)よくないよね」

まだまだ子供っぽさの残る生徒たちの中で、雪枝は見た目の雰囲気も、物の考え方も、ずいぶん大人びている。できあがった笹飾りを、放課後、それぞれが家に持ち帰った。

七夕の翌日、つまり八日の朝、保の様子が沈んでいた。

③その理由が判ったのは、一時間目が終わった直後だった。いつものようにその時間から姿を見た朱根を、新太郎が問いつめた。

「おまん、きのうの夕方、川へ行かへんかったか？」

明子は社会科の日本地図を黒板から外して丸めているところだったが、新太郎の語気がとげとげしかったので、思わずふり向いた。

「行ったで」

と朱根が相手を見返して答えている。

ほかの生徒たちは、何か息をつめるようにして、じつとふたりを見守っている。

新太郎が一步近づき、間近で睨み合う。

「そやろ。川の下(しも)のほうで、おまんが水にジャブジャブ入ったんを、六年のやつが見たゆうとった。おまん、川から笹拾うたやろ。拾うて土手の外へ捨てたやろ」

④朱根がゆっくりうなづく。

すると、新太郎の横にいた保がいきなり朱根に掴みかかっていた。朱根はそれを振り払い、逆に突き飛ばして保を床に転がした。保は起き上がったもういちど掴みかかったが、また振り払われ、突き転がされ、そして悔し泣きを始めた。

新太郎がふたりの間に入り込み、朱根に言う。

「あの笹はな、保の笹や。なんで勝手に捨てた」

「川が汚れるさけ」と朱根が言い返す。

「ほんでも一本ぐらいやったら、どうちゅうことあらへんやないか。あの笹に吊(つ)した短冊に、保はな、東京のおかあの病気が早よ治るようにゆう願いを書いとったんやぞ。もしもその願いがかなわへんかったら……保のおかあの病気が治らへんかったら、おまんのせいやぞ」

⑤「……」朱根は一瞬動揺の色を見せたが、何も言わず、口を一文字にして新太郎を見返している。

黙っている朱根の胸もとを新太郎が手荒く小突く。

「治らへんかったら、おまんのせいやぞ」

小突かれて上体が揺れても、朱根はいつもと違(ちが)ってやり返すこともせず、強い目で見返している。その目がすこし赤くなり、涙(なみだ)がじわじわと滲(にじ)んでゆく。涙ぐみながら、黙って見返している。

明子が仲裁しようとして口を開きかけたとき、朱根は身をひるがえして教室から飛び出してしまった。

川を見おろす丘。

……みんなはここを（お城）って呼んでるけど、なんでこれが（お城）なんだ。江戸城みたいな立派なお堀もないし、白壁のやぐらもないし、ただのちつぽけな丘じゃないか。

それでも豊はなんとなくこの場所が好きで、よくひとりで登ってくる。まばらに生えている木の梢が風に吹かれて、ときどき囁き声を出す。その音を聞いたりしながら、ここでぼんやり時を過ごす。

伊賀は山国だというが、周りに見える山々はどれもみな千メートルにも届かない。八千八百メートル以上もあるエベレストとは大違いだ。

去年の春、入院した母を見舞った帰りに映画を見た。元気をなくして無口になっていた豊と保に、父がとつぜん「映画でも見よう」と言って通りすがりの映画館へ入った。その映画が『エベレスト征服』だった。イギリス登山隊の一名が撮影した記録映画だ。それまで何組もの登山隊が失敗してきた世界でいちばん高い山への登頂の記録。

その映画を見て豊はびっくりしてしまった。

なぜわざわざこんな苦しい思いをするのだろうか。その苦しさは、豊の想像力ではとても追いつけないほど凄そうだった。なのに黙々と立ち向かってゆく男たち。凍える寒さのなかで何十日もかけて、酸素補給器まで背負って、一歩、歯痒いくらいにのろのろと、それでも時には笑顔さえ見せながら。

人間はこんなひどい苦しさも我慢することができると、こらえることができるんだ。打ち勝つことができるんだ。豊は胸がジンと熱くなった。

映画館を出たあと保がいろいろ質問したが、父はどこか上の空で返事をしていた。そして電車の駅から家へと歩く道すがら、低い声で言ったのだ。「お母さんとも相談したんだけどな、お母さんの病気が治るまで、おまえたちを、ばあちゃんのところへ行かせることにしたよ」

あれから一年がとくに過ぎたのに、母はまだ退院しない。

……お母さんはぼくらのことを心配しながら我慢して入院してる。お父さんも我慢して働いてる。みんな我慢だ。

いや、ぼくの我慢なんか大したことじゃない。ちつぽけな我慢だ、と豊は思う。エベレストの登山隊と比べたら、どうってことない。そうさ、どうってことない。

松の幹に凭れて、<sup>⑥</sup>ズボンのポケットから小さな固い紙の筒を取り出す。中にラムネ菓子が入っている。母が送ってくれたものだ。キャップを外そうとしたとき、後ろでガサガサと音がした。

幹から背中を起こして後ろを覗くと、草の中を歩いてくる朱根と目が合った。豊がそんなところにいるとは知らなかったらしく、朱根はビクッとして歩みを止めた。

今朝、新太郎に詰め寄られて涙を浮かべていた朱根の顔を、豊は思い出す。朱根の涙を見たのは初めてだ。

豊は木を離れてまっすぐ朱根と向かい合った。目を見交わしたまま立ちすくんだようにじっとしている朱根に、

「これ食べる？」

とラムネ菓子のお菓子の筒を見せた。

朱根は虚をつかれた表情で、黒目勝ちの瞳を大きく広げたが、やがてゆっくり近づいてきた。

「手を出して」

と豊が言うと、おずおずと片手をさし出した。そのてのひらに筒から数粒のラムネ菓子を落としてやる。

「くすりか？」と朱根が訊く。

たしかに菓の錠剤みたいに見える。

「ちがう。ラムネのお菓子だよ」

豊は自分のてのひらにも数粒落として口に放り込む。

朱根も口に入れたが、初めて食べたらしく、変な顔をする。それを見て豊が笑いを洩らすと、朱根も口もとをちよつとゆがめて、きまり悪げな笑みを浮かべた。

変わり者の朱根とこんなふうになるのは初めてなので、豊は少しきこちなくなる。朱根のほうにも戸惑

いがあるようで、お互いにどうしていいのか判らない。

「笹のこと、気にすんな」

そう言つてやると、朱根は一瞬うなだれ、けれどすぐ顔を上げて豊の目を見ながら鼻をこすり、ついでに首の横を掻き、

「気になんかしてへんわい」

と言いつて走り去った。

(多島斗志之『感傷コンパス』による)

問一 —— 線部①「明子のクラス」は、四年生二人、五年生四人の計六人からなる複式学級で、四、五年生とも男女同数である。新太郎は何年生か。

問二 本文中の (a) (d) にあてはまる語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア さつそく      イ ひときわ      ウ もちろん      エ やつぱり

問三 —— 線部②について。この時の朱根の気持ちに最も近いものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 反抗      イ ためらい      ウ 不安      エ はじらい      オ 困惑

問四 —— 線部③「その理由」とはどのようなことだったのか。具体的に説明しなさい。

問五 —— 線部④から朱根のどのような様子が読みとれるか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 何もかくす必要がないので、堂々と受けて立っている。  
 イ こうなることを予想していたので、余裕をもっている。  
 ウ 何を言われているか分からず、相手の出方を見ている。  
 エ 突然のことであつけにとられ、あいまいに答えている。

問六 —— 線部⑤について。この時の朱根の気持ちをていねいに説明しなさい。

問七 本文の初めの場面で豊は短冊にひとこと「エベレスト」と書いていたが、そこにはどのような思いが込められていたのか。簡潔に説明しなさい。

問八 —— 線部⑥について。豊が「小さな固い紙の筒」を取り出したのはなぜか。その理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分なりに納得することができたので、ほっとして手持ちぶさたになったから。  
 イ このところ我慢ばかりしているので、少しは好きなことをしたくなったから。  
 ウ 悩んだあげく考えがまとまらなくなったので、気分を切りかえようと思ったから。  
 エ 自分に言い聞かせはするのだが、やはり心の支えになるものがほしくなったから。

問九 ― 線部⑦のように話しかけた豊の気持ちを説明したものとして 最もふさわしいものを次の中から選び  
記号で答えなさい。

- ア 話すらなかなかできずにいた朱根と仲良くなれる良い機会だと思った。
- イ 非難されるだろうと身構えている朱根の気持ちをやわらげようと思った。
- ウ お菓子を送ってもらったことかうれしくて 誰かに自慢したいと思った。
- エ 一人で食べるのは気がひけるので 朱根にも分けてあげようと思った。

問十 ― 線部⑧について。朱根はどのようなことが「きまり悪」かったのか。次の中から最もふさわしいものを  
選び 記号で答えなさい。

- ア 貧しくて、ラムネ菓子すら食べたことがなかったこと。
- イ 二人きりで 誰もいない所で親しげにしていること。
- ウ 優しくされ つい素直な気持ちを表してしまったこと。
- エ 思わず変な顔をして 豊に笑われてしまったこと。

二 次 次の記事を読んで 後の問に答えなさい。

著作権上の都合により文章の掲載はできません

著作権上の都合により文章の掲載はできません

(渡辺文雄『旅でもらったその一言』による)

問一 文中の **A** を補うのに最も適当な漢字一字を答えなさい。

問二 —— 線部①のように筆者が感じている理由の説明として最も適当と思われるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 仕事場の様子から、仕事に対するひたむきさが感じられないから。
- イ 筆者は、面打ちの仕事の苦労を理解することができないから。
- ウ 普段から筆者が、時間にしばられて仕事や生活をしているから。
- エ 名人なのだから、もっと手際よく作れるはずだと思っているから。

問三 —— 線部②「にべもない」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 無遠慮    イ 無気力    ウ 無自覚    エ 無愛想    オ 無理解

問四 —— 線部③について。このような自分を筆者はどういう人間ととらえているか。それをもっとも簡潔に表現している一語を、文中から抜き出しなさい。

問五 文中の **B** と **C** を補うのに最も適当な語句の組み合わせを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 多い — 少ない  
 イ 濃い — 薄い  
 ウ 大きい — 小さい  
 エ うまい — へた  
 オ 強い — 弱い

問六 — 線部④について。丸尾さんの場合、「残った痕跡を認める」ことは、どのように考え、行動することにながるのか。丸尾さんの言葉を参考にしながら簡潔に説明しなさい。

問七 — 線部⑤とあるが、筆者は自分と丸尾さんの仕事のあり方に大きな差があることを痛感しているようだ。では、どのように違うと考えているか。文章全体をふまえ、わかりやすく説明しなさい。

問八 — 線部⑥とあるが、丸尾さんもこのような「脅え」と無関係ではないようだ。そのことがうかがえる表現を丸尾さんの言葉の中から見つけ、十五字以内で抜き出しなさい。

三 次の — 線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 委員長のセキムを果たす。  
 ② 信念をダンコとして曲げない。  
 ③ ホガらかな青空が広がっている。  
 ④ 寒さで赤みを才びた頬。  
 ⑤ ジュウライのやり方を改める。  
 ⑥ 使いナれた辞書を持参する。  
 ⑦ 生徒をインソツして動物園に行く。